

『東方』二八一号より

## 中国知識人の見た 明治期の日本

山根 幸夫（東洋文庫）

本書の著者佐藤三郎氏は東大文学部国史学科の卒業生であるが、当時国史学科では平泉澄教授の皇国史観が席捲し、客観的な学問研究はできない状態にあった。中世史研究を目ざした佐藤氏ではあったが、北京に新設された北京近代科学図書館の司書として赴任、近代日中交流史の研究に関わることになり、それが佐藤氏のライフ・ワークとなった。北京在任中、中国知識人の見た明治日本の記録（東游日記）に強い関心を抱き、積極的に蒐書につとめて二百種ばかり集められた由である。

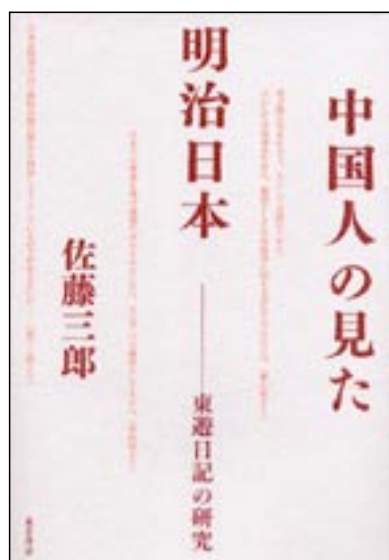
一九四二年八月、旧制山形高校教授に任命され帰国されたが、その際「東游日記」を日本に持ち帰られた。それが本書の基礎になっている。これだけ多数の東游日記を個人で所有する例は他に見当るまい。佐藤氏は戦後は山形大学教授となり、定年後は上京して国士舘大学教授に就任されたが、一貫して近代日中関係史の研究に専念された。九二歳の現在、なお孜孜として研究を継続されている姿勢には、全く頭のさがる思いである。

さて、本書には十二種の「東游日記」が収められている。それは左の通りである。

- ① 李圭（浙海関書記）東行日記
- ② 何如璋（初代駐日公使）使東述略
- ③ 李筱圃（吉安府同知）日本紀游

佐藤三郎著

『中国人の見た明治日本——東遊日記の研究』  
A5判・二六四頁・東方書店・三、九〇〇円



- ④ 王之春（道員）談瀛録
  - ⑤ 王詠霓（外交官）道西斎日記
  - ⑥ 李春生（実業家）東遊六十四日随筆
  - ⑦ 章宗祥（駐日公使）日本遊学指南
  - ⑧ 胡玉縉（候補知県）甲辰東游日記
  - ⑨ 黄尊三（留学生）日本留学日記
  - ⑩ 黄慶澄（孫詒讓の友人）東游日記
  - ⑪ 丁鴻臣（簡放提督）四川派赴東瀛游歴閱操日記
  - ⑫ 尹蘊清（中学校長）考察教育日記
- 右の中、⑨については、佐藤氏は実藤惠秀氏（故人、早大教授）と共訳して、一九八六年東方書店より刊行している。⑨⑪を除く十種の東游日記については、佐藤氏は一九九一年から二〇〇二年にかけて、雑誌『藝林』にその紹介を試みている。⑪のみは『日本歴史』に紹介されている。これらの長年にわたる考察をまとめて、本書を完成されたのである。

⑦『日本遊学指南』の著書章宗祥は、五四運動の際、駐日公使の職にあり、売国官僚として学生たちの非難、攻撃の的となった。本書は彼が東京帝大法科大学に留学中、友人の求めに応じて、日本留学を希望する中国青年のために著した留学手引書である。章は日本へ留学する利点として、第一に中国と同じ文字を使い、第二に地理的に近く、したがって第三に費用が少なくて済むことを挙げる。そして、日本に渡航する手順と留学費用について、具体的な数字をあげて説明している。まず日本へ渡航するには、華北なら山東省芝罘から、華中なら上海から汽船で神戸まで行き、ここで汽車に乗りかえて東京へ行くことを説明する。船賃、汽車賃についても、一等、二等、三等の各料金を示す。入学する場合、学費として、受験料、授業料について、官立学校、私立学校に分けてその金額を示す。更に住宿费について、寄宿舎でなく下宿の場合、やはり上、中、下三等に分けて、具体的な数字を示している。その他、書籍・筆墨費、雑費（理髪、入浴、洗濯など）、交際費などの数字も掲げる。具体的な数字の示されていることは、留学志望者にとって目安になる。最後に、章は「学問を求める我が国の人が留学すべき国としては、日本の右に出るものがないことは疑を容れる余地がない」、「日本が明治維新以来三十余年にして富強を致したことは、日本の学問が実際に役に立つことの明白な証拠」と結んでいる。当時の留学案内書としては、きわめて適切なものであったと思われる。

⑧胡玉縉『甲辰東游日記』について、佐藤氏は胡の詳しい経歴はわからないとされるが、彼は江蘇呉興の人で、光緒一七年の挙人、光緒二十九年の召試で一等第六席に選ばれ、湖北候補知県の資格で総督・撫院の文案作成に当たっていた。翌三〇年二カ月間、視察のため日本へ赴いた際の

トップページにもどる

日記である。その前半を教育関係後半を官公庁、産業関係機関の視察に充てた。東京帝大、東京高師・附属中・小学校、女高師・附属高女・小学校・幼稚園、府立一中、美術学校、音楽学校、東京高商、東京高等工業、盲啞学校、更に陸軍士官学校まで見学している。彼は日記に視察内容とその時々感想をかなり詳しく書き残している。例えば、東京高商を訪れたら、丁度卒業式であったが、校長の式辞のあと、農商務大臣が訓辞して「商業を盛んにするには、欧米語だけではなく、中国語も勉強する必要がある」と説いたと云う。胡は我が商業界をひとたび日本の蹂躪に委ねた場合、これに抵抗しなければ大変なことになってしまうと恐れている。学校視察中に胡が目したのは、日本では身体障害者や貧家の子弟のための教育にも意が用いられている点であった。私立女子職業学校は、小学校を卒業したが貧しくて上級学校に進むことの出来ない貧家の子女のために設けられたもので、染色・刺繍・造花などの手芸を教え、校内または家庭で作った製品を学校が売り捌き、その代金の半分を本人に交付し、半分を学校の運営に充てているもので、胡は「法、至善なり」と評している。帰国後は学部転じ、主事、員外郎などに任じたが、民国になってからは仕えなかった。但し、東方文化事業で北京人文科学研究所が設置された際、その研究員に任ぜられている。

⑩黄慶澄『東游日記』によれば、彼は一八九三年上海より出帆、長崎を経て、神戸に到着した。その際、清国領事館を訪問、胥孝胥領事（後の満州国の初代国務総理）に面会した。更に船で横浜に到着、山崎屋という旅館に宿泊したが、風呂で男女混浴していることに驚きの眼を見張っている。これは黄のみでなく、すべての中国人が驚いている。例えば、王詠霓も風呂屋へ行ったが「男女混浴が西洋

人の非難を浴びたので、浴槽の上を壁で二つに仕切ったが、仕切りの下の方を人が通れるぐらい開けてあり、二階から眺めると裸体が丸見えなのにそれをちつとも恥としない」と批判している。このように二〇世紀初め、日本の銭湯では平然と男女混浴の風習が存在したことに気付かされる。なお、黄の日本視察が清国高官による推薦と駐日公使の資金提供によってなされたこと、来日後に長崎、神戸、横浜などの領事館が彼を丁重に遇し東京の公使館も半月間にわたる彼の滞京中の宿舍として、構内の建物を提供した事実などから見て、彼の訪日旅行には表面上の目的のほかに、時局関係の偵察というような別の目的も隠されていたのではないかと推測している。旅行の翌年（一八九四）に刊行されたこの日記は、まもなく日清戦争が始まったこともあってか清国読書人の間にかなりの関心を惹き起こしたらしいと指摘している。

以上三点の東游日記を紹介したにすぎないが、私たちは佐藤氏の考察を通じて色々のことを教えられる。視察者の官職やその地位によって、日本に対する関心や興味に相異もみられるが、全体に共通して言えることは、日本が西洋の新しい学問や技術を摂取して、著しい発展をとげたことに学ばねばならぬとしている。そのためには留学生を西洋に派遣して、新しい学問や技術を摂取させねばならぬが、それを実行するには長い年月と巨額の経費が必要となる。故に、既にこの方法を実施して大きな成果を挙げた日本へ留学生を派遣すべきでないか、という結論に達している。そのための準備として数多くの東游日記が書かれたのである。

佐藤氏が本書で紹介された東游日記は多数の游记のごく一部である。佐藤氏が今後もそれらの紹介をつづけて

今月の『東方』

書評目次へ

トップページにもどる

下さることを期待してやまない。なお、筆者の希望を述べれば、簡単なものでも好いから、人名索引をつけて下さることである。読者にとっても、人名索引があればどれだけ便利か知れないであろう。佐藤氏の最初の勤務先が「北京日本近代科学図書館」となっているが、「日本」は余計である。上海の場合は、確かに在上海日本近代科学図書館と称した。